

沼津 兵學 校記 念碑

富嶽之陽狩水之上有名區曰沼津往時有城青松白壁與江山掩映其名特著明治紀元東方

甫定 朝廷封我德川公於駿河遠江治于靜岡是以沼津遂為靜岡都城矣公之就封也共從

者如歸市乃命有司所在安撫而別聚水陸軍人乃子弟俊秀者於斯地以城充學館以講兵焉

所設課業有數目曰漢學曰洋學曰數理曰圖畫曰體操練兵曰騎曰泅脩之一二年其人彬彬

可用矣以故列國行人之使於靜岡者必請來觀或遣其藩人就而學若慶島德島特聘吾學官

以訓練士卒蓋以維新之初列國學制未備而沼津兵學為之率先也四年 朝廷徵藩為縣以

學館合於陸軍兵學寮於是在學諸子半升于 朝半去而改業及歷歲月或為陸海軍將校或

為院省名官為商為農為衆議院議員為銀行公司之長為博士為學士為大小學校之教官其

在 朝與否咸莫不竭力國家而知名當世者則昔日苦學之功至是始彰而公之欲忠

皇國之志亦酬矣自學館之廢于今二十餘年同窓之人歲時相會每語往事頗有今昔之慨恒

言沼津則吾輩起身之地雖學館廢已久何能無眷々於懷耶頃者相議立石其舊趾請公篆乎

額令淑紀之以永傳後祀意在不忘其本爾豈敢誇其多材云哉

明治廿七年九月 中根 淑 撰

大川 通 久 書
平 田 清 吉 鐫

*この碑は、JR沼津駅南
大手町城岡神社境内にあ
ったが、碑面の剝離がひ
どく、現在は、城岡神社
の改築に併せ複製し境内
に建立されている。

*明治二七年に沼津兵学校
及び附属小学校卒業生六
十余名が城岡神社に集合
した際、贖金し、この記
念碑を建立した。
発起者
土 肥 高 正
西 村 鉄五郎
中 村 六三郎
山 形 敬 雄
間 宮 信 行
小 松 陳 盛
江 原 素 六

*「沼津兵学校記念碑」の
篆額は、徳川家達公の筆
です。
*撰文者 中根 淑(逸郎)

沼津兵学校三等教授方書
史教授、参謀本部出仕。
*大川通久は、沼津兵学校
第二期卒業生。

沼津兵学校記念碑書下し文

富岳の陽、狩水(狩野川)のほとりに名区(景色のよい所)あり、曰く沼津と。往時城あり、青松白壁と江山と掩映し、その名特に著はる。明治紀元、東方甫めて定まり朝廷我が徳川公をして駿河遠江に封じて静岡を治めしむ。これを以て沼津は遂に静岡の都城となる。公(徳川公)の封に就くや、その従う者市に帰するが如し。乃ち有司(役人)に命じて所在を安撫(民を安心させる)し、別に水陸軍人及び子弟の俊秀なる者をこの地に聚め、城を以て学館に充て以て兵を講す。所設の課業には数目あり。曰く漢学、曰く洋学、曰く数理、曰く図画、曰く体操練兵、曰く騎、曰く泳(水泳)と、これを修むること一・二年その人、彬々として用うるべし。故を以て列国の行人(役人)の静岡に使用する者必ず請ひて来觀す。或いは、その藩人を遣はして就きて学ばしむ。鹿児島、徳島の如きは、特に我が学官を聘して以て士卒を訓練す。蓋し維新の始めを以て、列国の学制いまだ備らず、沼津兵学これが率先をなす。(明治)四年、朝廷、藩を徹して県となし、学館を以て陸軍兵学校に合す。是において、在学の諸子、半ば朝に升起り(上京して)半ば去りて業を改む。歲月歴るに及び、或いは陸海軍の将校となり、或いは院省の名官となり、商となり、農となり、衆議院議員となり、銀行会社の長となり、博士となり、学士となり、大小学校の教官となる。その朝に在ると否と(官庁や民間に係わらず)みな力を國家に竭くせざるはなし(尽くさない者はない)当世に知名の者、則ち昔日の苦学の功ここに至って始めて彰はれ、公の皇國に忠ならんと欲するの志また酬はれり。学館の廃するより、今は二十余年、同窓の人、歳時相会し、往事を語る毎に、頗る今昔の慨あり。つねに言う沼津は則ち我輩の起身の地なりと。学館廃してすでに久しといへども、何ぞよく眷々として懐かしきこと無けんや。このごろ相識かり、石をその旧趾に立て、公(徳川家達)に請ひて額を篆し、淑(選文者)にこれを紀せしめ以て永く後に伝え祀せんとす。意はその本を忘れざるにあるのみ。豈に敢えてその多材を誇ると言わんや(碑建立の真意は、兵学校の存在を後世に伝え祭祀して、その本質を忘れまいとするのみで、我々の人材の豊かさを誇ろうとしているのではない)。

沼津兵学校碑文

明治元年徳川家達公移封駿府先是幕府奉還大政麾下士解常職及起兵学校及付属小学校於沼津以養成士官為主取範歐米為新教育之先及徹藩公獻之政府合於陸軍兵学校兵学校開期僅三年有半生徒不過二百餘人然皆一時之選新進氣鋭以天下為已任他日為將校為官吏供國家之用者濟濟輩出吾公育英造士之旨於是達矣嗚呼偉哉及今鄉人追思曩昔之盛事不能禁於懷為設沼津兵学校創立七十周年記念会以與式典又建石於校址請公嗣家正公表題囑余記碑陰余亦係幕臣裔誼不可辭世乃記其緣由以勗後人

侯爵徳川家正題字

文学博士塩谷温選

石川道正書

昭和十五年十一月

沼津兵学校創立七十周年記念会

高嶋清助鑄

「沼津兵学校碑文」書き下し文

明治元年徳川家達公、駿府に移封さる。先には是れ幕府は、大政を奉還し麾下の士の常職を解く。兵学校及び附属小学校を沼津に起すに及び以て士官を養成するに、主に範を歐米に取爲れ、新教育の先と爲す。藩を徹するに及び、公これを政府に獻じ陸軍兵学校に合す。惟

兵学校の開期僅かに三年有半、生徒は二百余人に過ぎず。然れども皆、一時の新進氣鋭に選ばれ、天下を以て己の任と爲す。他日

將校と爲り官吏と爲り國家の用いる者、濟濟として輩出し。吾が公の育英、士を造るの旨、是に於いて達す。嗚呼偉なる哉、今に及び郷人

曩昔の盛事を追思し懷を禁ずる能はず。沼津兵学校創立七十周年記念会を設け爲れ、以て式典と與に又石を校址に建つ。公の嗣家正公に表題を請ひ、余に碑陰を囑す。余も亦幕臣の裔に係わる誼に辭するべからず。世の其の緣由を記し、以て後人に勗す。

侯爵徳川家正題字

文学博士塩谷温選

石川道正書

昭和十五年十一月

沼津兵学校創立七十周年記念会

高嶋清助鑄

裏面は口語訳

「沼津兵学校碑文」口語訳

明治元年に徳川家達公は、新政府によって静岡に、国替えさせられました。その前に幕府は、国の政を天皇に返還し、後に、仕えていた家臣達は職を失いました。家達公は沼津に兵学校と附属小学校を開校し、軍隊の士官を養成しました。

その教育様式を欧米に見習いましたが、これが、我が国の新教育の始まりとなったのです。政府は、藩を廃止して県を置く政策を取りましたので、家達公は、兵学校を政府に献上しました。こうして兵学校は、東京にあった政府の陸軍兵学校に組入れられてしまいました。そこで、兵学校は、開校以来三年半で閉校となり、卒業生は二百余人だけでしたが、これらの生徒は、当時の新進気鋭の秀才として選ばれ、維新以後の世の建て直しは、私達の責務であると自覚していました。

この人達は、後に将校となったり国の役人となったりして、国家の復興のため採用された者が、ぞくぞくと出て、我が家達公の人材育成の目的は達成されたのでした。ああ、これは何と偉大なことではありませんか。

今日になって、縁りのある郷土の人々は、昔、兵学校の盛んだった頃を思い出し、その懐かしさのあまり、沼津兵学校創立七十周年記念会を開催し、式典と共に記念碑を兵学校の址に建立しました。家達公の子息、家正公には碑文の表題を頼のみ、私は碑文を頼まれました。私も親臣の子孫であるために断る事もできませんでした。そこで、世間と兵学校との係わりなどを記録しまして、後々の人々への励ましとしました。

侯爵徳川家正題字（題字を書いた人） 文学博士塩谷温選（文を作成した人） 石川道正書（文を清書した人）

昭和十五年十一月 沼津兵学校創立七十周年記念会 高嶋清助鑄（碑に文字を刻んだ人）